07/7/1　第16号

ニュースレター

★三重豪NZ会報　2007年初夏号★

〔総会の延長について～挨拶に代えて〕　　会長　宮本忠

ゴールデンウイークが過ぎ、初夏の緑が鮮やかさを増しています。会員のみなさんお変わりございませんか。早速の私事で恐縮です。東北公益文科大学大学院博士課程の新設にともない、4月1日より山形県鶴岡市で、教授を務めています。この事態のため、例年5月末に開催している協会の総会を延期せざるをえなくなりました。役員会と協議しながら、事務ならびに総会開催の準備を進めてまいります。なにとぞひらによろしくお願い申し上げます。

なお、山形への転居にともない、パソコン環境がが変化し、せっかく開通したドメイン（コリンズ）が使用できなくなりました。そのためこれを廃止して、tyy15105m@kch.biglobe.ne.jp に改めました。従来の ty1005@mecha.ne.jp も廃止します。協会ホームページアドレスはいままでと同様です。mieoznz.com

会長連絡先：東北公益文科大学大学院（鶴岡市馬場町）
e-メール；miyamoto@koeki-u.ac.jp　電話　；0235－29－0547（直通）　鈴鹿電話；059－368－2112

●　多くのご支援の下、絵本贈呈運動大きな成果

‘お礼とご報告’大野福代（協会生活担当理事）

去年の7月下旬、ニュージーランドのオークランドでボランティア活動をしている代表の宮内直子さんから当協会に絵本寄付の要請がありました。彼女を含むボランティアスタッフ数名が「日本語絵本図書館 inch」設立を目指し、絵本などの募集を国内と日本で呼びかけました。2006年7月までに約400冊の寄付があったそうです。

絵本の寄付は当協会の趣旨に沿いますので当三重豪ＮＺ協会で協力することになり、9月下旬に、10歳くらいまでの子供の絵本、紙芝居、児童書などの寄付を会員の皆様にお願いしました。当初なかなかあつまりませんでしたが、10月20日くらいからたくさんのご寄贈・寄付があり嬉しく思いました。なかでも、日本を代表する有名な絵本作家の加古里子先生から彼自身の多数の絵本と紙芝居を寄付していただきました。また、木村良夫氏から日本固有の「児童文化財を楽しんでいただきたいという願い」から木製舞台付の貴重な紙芝居を寄付していただきました。

11月10日の締切日までに合計200冊ほどの絵本、児童書、紙芝居が生活担当の私のところに宅急便や郵便で送られてきました。当協会の会員が11月下旬から12月上旬にかけて、ニュージーランド南島の旅行（第6回豪ＮＺ親善交流の旅）へ行くとき、会員が手分けしてオークランドまで運ぼうとも考えました。しかし、「クリスマスまでには届けられない」という時間的制約および予想をはるかに超える温かいたくさんのご寄贈・寄付が集まり旅行のついでにもってゆくことは物理的に無理になりました。思案の末、ニュージーランドの宮内さん宅に協会から郵送しました。そして郵便小包船便で絵本3箱と紙芝居4箱が無事、1月6日に現地に届きました。クリスマスには間に合いませんでしたが、宮内さんから喜びの返事をいただき、安心しました。以下、宮内さんから皆様への感謝のお言葉です。

「大変状態のよい本がたくさん届き嬉しく思っています。オークランドにお越しの際は是非小さな図書館にお立ち寄りいただければ幸いです。この度のご協力に改めて感謝申し上げます。」

私は一度もニュージーランドに行ったことがありませんが、いつか機会があれば、絵本図書館に立ち寄りたいと思っています。

以下、絵本などのご寄贈・ご寄付をしていただいた方のご芳名です。（敬称略）

加古里子　絵本125冊、紙芝居7点、大型紙芝居2点
木村良夫　紙芝居6点（ｶｾｯﾄ、小冊子付）、大型紙芝居2点（ｶｾｯﾄ、CD、絵本付）、携帯用ケース入り紙芝居3点
伊藤和子　1万円（協会の方で絵本を買いました）
（以下、アイウエオ順）
大野福代、倉形幸枝、長川朋香、満留みちる、宮本由紀子、森田ミヨ子

協会の募集締め切り後も、ご寄贈の申し出をたまわりました。インチの宮内さんと協議の上、当協会の今回の募集作業は一応、打ち止めといたすことにしました。皆様からの温かい善意で、当協会の一つの活動を成功させていただきました。心よりお礼申し上げますとともに、ご報告いたします。

‘ＮＺに日本語絵本図書館オープン’　代表　宮内直子

ニュージーランド最大の都市、オークランド（北島）の北に位置するノースショア市に、子ども向けの日本語図書を扱う図書館「ニュージーランドにほんごえほんとしょかん inch（以下 inch)」が昨年12月、オープン致しました。『親子で大切にしたい一冊を見つけること』をテーマに、より日本語図書を身近なものにするため、利用料のかからない図書館のあり方を求め、活動開始後、約一年、ようやくオープンの日を迎えることができました。

さて、現在ニュージーランドの総人口が約430万人。そのうち邦人滞在者数は1万人以上といわれています。オークランド地方には、ニュージーランド総人口のおよそ三分の一以上が暮らしているといわれ、日本人も数多く暮らしています。また世界各国からの移住者も多く、各々の文化が融合し、独特な町並みが形成されています。

公用語は英語と先住民言語のマオリ語ですが、普段使われるのは英語がほとんどです。このような環境の中、子育てをする私たち親にとって常に大きな課題となるのが、いかにわが子に日本語や日本の文化を伝えていくか、ということです。簡単なことではありませんが、非常に重要なことです。少しでも多くの子どもたちに、気軽に日本語に触れる機会を提供できること、それが私たちの願いです。

はじまりこそ小さな活動でしたが、今では大変大きな広がりを見せ、多くの応援をいただくようになりました。資金作りのためのバザーやこどもまつりなどの催しも開催しています。しかしながら、新規に図書の購入することはいまだ難しく、貸し出しに使われる図書の全ては国内および、日本からご寄付いただいています。昨年 10月末まで、輸送費用軽減のため神戸に絵本のご寄付受付窓口を設け、コンテナによる一括輸送も実現いたしました。また、三重オーストラリア・ニュージランド協会のみなさまにもたくさんのご支援をいただき、2007年2月現在、約3500冊の蔵書を誇る大きな図書館に成長することができました。この場をおかりしまして、改めて、皆様のご協力とご理解にお礼申し上げます。

私たちの目指す図書館というのは、決して立派なものではありません。日本の各地で活躍されている「文庫」をイメージしてくださるといいかもしれません。inch もスタッフの個人宅の庭にたてられた小さな小屋での活動です。産声を上げたばかりの活動ですが、これからもみなさまからのご協力とご理解を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

●　第6回　豪ＮＺ親善交流の旅～南島を行く

平成18年度当事業は、2006年11月24日から12月5日の12日間、北出勲旅行リーダーの下、一班五名、二班七名合計12名で実施されました。全員無事予定通り帰国しました。ご理解とご協力ありがとうございました。「11－12月のニュージーランド親善交流の旅は、一部異常気象の冷夏でした。しかしレコード盤にたとえるならば、A面はトレッキング、スチュワート島、モエラキボルダーなどの自然豊かな旅、B面はいたるところで歓迎された色彩と香り豊かなバラ、バラ、バラのガーデンという贅沢な旅となりました。」（会長の年賀状から）

‘今も目に浮かぶニュージーランド’第二班　須藤加代子

11月24日　名古屋集合　関空より出発

25日　クライストチャーチ着（乗り換え）国内線にてクイーンズタウン。明日から五日間連続トレッキングの第一版五人と一旦別れ、私たち第二班は、南島の南端を目指すことになる。

26日　7：30　ルートバントレッキングの日、往復14km。ガイドのキヨミさんとマイクロバスにて二班七名がグルノーキーへ。入り口、グルノーキーへ出るまでにワカティプ湖畔を走るマイクロバス快調。3 つの島のうちの1つピジョンアイランドは外来種を除いて原生林に戻そうと植林がなされているそうだ。前日、夏としては珍しい雪、山の頂薄化粧。グルノーキーにて10時に唯一の喫茶店でモーニングティー。ジャスミン、ストロベリーのハーブティーとショートケーキ。羊の牧場は8〜9月子羊が生まれ、まもなくしっぽを切るのはウンチがつくため。

いよいよトレッキング：ナット川にジェットボートあり。ときおり小雨や激しくミゾレの舞う中、昔からの生態系が残る山の風景を、ガイドのキヨミさんの興味深い説明を聞きながら歩く。赤、山、銀ビーチつまりぶな三種。マオリが虫歯の痛み止めに使うペッパートゥリー、ビーチトゥリーの実を食べるねずみ、おこじょ、ポッサムが異常発生。その対策に苦慮。目の前をネズミが走る。1994年の大雨で木のなだれ発生。土が浅く木の根がくっつきあっているために生じる木のなだれ、1862年頃ゴールドラッシュで中国からの移住者が増えたのは昔の話。葉が下に向かうランスウッドは成長するとすっかり姿を変える。全面黒目の愛らしいサウスアイランドロビンやベルバードの可愛いい歌声。オールドマンズベアドという大きな木にぶら下がった白いコケ。川近くに広がった頂の平坦な所にある大きな山小屋でランチタイム。帰路は主としてくだり。山道ゆえに大きな石ゴロゴロ、勾配の急な箇所、木の根っこもある。吊り橋から見下ろす谷川もあった。楽しいトレッキングだったので日頃鍛えていない私の足でも十分歩けた。14km、1日コースもランラン気分。6人の仲間もそれぞれに元気をもらったようでした。前日降った雪に飾られたサザンアルプスの美しさは帰国後も度々目に浮かぶ。

27日　遠距離定期バスにてインバカーギルへ

運転手さんは農業をしていたが、勤勉でないのでこの仕事に変わったと笑いながら話してくださった。「夏に雪が積もったのは初めての経験で、異常気候だ。」だが「自然が王様」など気さくにいろいろとマイクで案内してくれる。旅行が暖かくなった一因です。

28日　モーテル近くの魚屋でグリーンリップムール貝　1kg　5ドル。7人みんなでスープにして舌鼓。バスでブルフ港へ行くが9時発高速船、嵐のため欠航。11時便予約満席、嵐でこれも出航せず。夕方便に乗船できるように、バスの運転手さんあちこち走り回ってくれる。夕方までインバカーギル市内にバスで戻る。運転手さん、待ち場所を間違えたおばあさんを乗せるためひきかえした。NZヒューマニズムをみた。バスは新聞運搬、宅急便の役割も果たす。新聞などと一緒にゆれながら郵政民営化のことを思った。クィーンズパークにあるアートギャラリーは見ごたえあり。チャリティー・ショップで1バック3ドルの素敵なフード付コート他をゲット。寄付による品物ということだったが「似合う、似合う」といってくださった。バスで再び港に戻る。午後5時発便に乗船。大荒れで多くが船酔。ブルフからスチュアート島に渡る。島は最近、国立公園になった。

今晩はクライフィッシュに舌鼓！（I市のモーテルにて）

海中の黒点はアザラシ（ナゲット岬にて）

撮影：木野

29日　波止場近くの店で朝飯材料買う。インフォメーションで雨の日のプランとしてマイクロバスにて島巡り（スコットランド博物館、ゴルフ場（年会費7000円位）、ボート造船所、水力発電所（10年位前より発電）、アートショップ）。ホリデーハウスが目立つ。ス

チュワートホスピタル。山道を歩いている人を見れば町まで乗せる。害獣とされるポッサムを防ぐための柵（島内に広がらないように）、無医村なのでお産もインバカーギルへ、ゴミも同市に持ち出し、島の 85%が原生林、17 人の小学生。仲間が小雨の中、波止場で釣り。COD という魚が入れ食い、25ｃｍ以上の魚持ち帰り許可される。突然、ペンギンが海中から顔を出した。

30 日　レンタカーでダニーデンへ。ＮＺの国家形成の基礎は、ワイタンギ条約。条約は、1840 年、先住民マオリの酋長たちと英国の君主との間で締結された。予約してあった郊外のモーテルに到着。

12 月 1 日　ガソリンをセルフサービスでいれオタゴ半島へ。アルバトロス（アホウドリ）は観察できなかった。ロイヤルNZ ブラインド　ファウンデーション（視覚障害者協会）を訪ねたが白杖担当者不在で用件満たせず。ダニーデン駅は観光用に１日１便の列車あるのみ。中心地にてショッピング。6 匹の羊のぬいぐるみを買い、モーテルのテーブルに並べたら、「かわいい」となかなか好評だった。ショッピングの後、モールの地下にて食事（中華ヌードル、酢豚、ナンカレー）。他のグループは黄頭ペンギン観光。

2 日　入り江で PIPI 貝拾い（これぞまさしく貝拾い、日本の場合は貝探し）、その場でも食し、残りはスープ用にモーテルにもちかえる（海水も）。オタゴ大学、ボタニックガーデン（サンドイッチ、キッシュ、ピザ、バーガーなどの昼飯）、住宅街にある世界一急な坂を車で上り下り。ダニーデンに別れを告げ、モエラキボルダーで見学。浜や海の中に大きな丸い石が点々と。大人が三人も乗れる大きさ、波の花が舞う。ペンギンで有名なオマルーにて五日間トレッキングを成功させた一班と合流。夜、ブルーペンギンが浜に帰って来て行列をなす。

3 日　サザンアルプスに雪。ティマルーでグリーンボーリング見学。南島最大のクライストチャーチ着。ここは沼地を埋めた 30 万人都市。四日市位の人口規模。広大なハグレー公園。トラムで市街中心部を一周。モナベール（旧邸宅をレストランに改造）の美しい庭園でバラの香りと色に酔う。

4 日　2 時間の郊外ドライブで、火山温泉リゾート・ハンマースプリングス。ゆっくり旅の疲れを癒す。スープオブザデイ（トマト味）8．5 ドルの昼飯。帰路、途上のワイパパウエストでワイナリーによりテスティングとショッピング。

5 日　早朝クライストチャーチ空港へ。国内線でオークランド、そして関空まで 8943ｋｍ11 時間弱。

緑に白、目を閉じるとあののどかな牧場風景と羊の群れが浮かびます。いつ見ても羊は草を食んでいたように思います。また、カメラを近づけると逃げる臆病さも経験しました。幼い羊は長いしっぽをつけていることも観察できました。自分の結婚記念日を親子三代で祝っているモーテルの隣の部屋のおばあさんが、白い小魚の入ったオムレツをたくさん焼いたのでたべてみてと招いてくださったり、モーテルオーナーの奥さんが最近まで日本女性がハウスキーパーとして働いてくれていたと庭での私たちのバーベキューに顔をだしてくださったり、昼食時隣の男性が弟が大阪で英語教師をしていると話しかけてくださったり、好意的な方々と出会えた楽しい、友好的な NZ の 12 日間の生活でした。

バーベキュー（CHCH のモーテル）

撮影：北出

‘ミルフォード・トラックを歩いて’　杉山　節子

11 月 27 日～12 月 1 日 4 泊 5 日、初夏憧れのミルフォード・トラックのトレッキングに出かけました。トレッキング前日、その説明を、南島の観光拠点都市・クイーンズタウンにて聞き不安と嬉しさでワクワクドキドキです。55㎞を 4 日間で歩きます。今まで経験したことも無い距離です。思っていたよりのんびり楽しく歩くことが出来ました。自然に囲まれた素敵な散歩道です。

さあ４日間頑張るぞ　撮影：北出

年間の雨量が6,000㎜を上回るという雨の多い国立公園お天気には余り恵まれませんでしたが、雨のおかげで素晴らしい景色に巡り合うことが出来ました。雨の中の花、高山植物で白いマウントクックリリーを見ることが出来感動です。雨水が花びらにかかり白い色が生き生きしている花を見つけた時は雨が降っていることも忘れてシャッターを押してしまいました。

トレッキングの中で一番の難所と言われている、マッキンノン峠、峠越えといっても１時間位で登ることができます。お天気が良ければ氷河を頂く周囲の山々の絶景を見ることが出来たのですが嵐の中それも叶いませんでした。マッキンノン峠では池塘の広がる草原でマウントクックリリーの群生に会うことが出来ました。夏本番になると峠では高山植物の花畑が出来るそうです。大雨と突風の峠越えでしたが、ガイドさん　オーストラリアの勇敢な青年の助けで嵐の中を、全員、無事に歩くことが出来ました。ミルフォード・トラックは苔とシダの散歩道です。雨が降ると苔もシダも生き生きして自分たちの存在感を示します。雨が降らないと出会えない雄大なＵ字谷の下から見る両側の絶壁、そこを流れる数十本もの滝が出来その景色は素晴らしいものでした。その水が濁流となり私たちの歩行を止めてしまうほどです。日本の山では今まで経験したことがありません。又それも楽しい素晴らしい思い出となりました。

アップダウンも余り無く歩きやすい散歩道、人なつっこい野鳥にも出会う事が出来、自分たちのペースで決められた時間内で山小屋から次の山小屋にたどり着けばいいので時計を見ながら周りの景色に心安らぎ感動し写真に取りゆったりと歩くことが出来ました。

55㎞踏破　やったあ！
撮影：北出

また山小屋は日本では考えられない設備が整った快適な山小屋です。乾燥室、シャワー、水洗トイレ、とても充実しています。部屋も２段ベッド、私達グループは日本人だけで泊ることが出来ました。食事もコース料理で出ます。とても美味しく山の中での食事とは思えません。昼食のサンドイッチ作り、夕食時の単語英語の楽しい会話、片言のあやしい日本語も飛び交っていました。とても楽しく今までのツアー旅行では経験出来ない事ばかりです。単語英語でも恐れず自分から友達を作り仲間に入る楽しさを学びました。

５日間のトレッキング　心に残る素晴らしい思い出となりました。

これぞ国際親善
撮影：北出

‘南極に一番近い島ニュージーランド’　　高木　弘二

11月24日　関空からクライスチャーチで乗り換え、さらに空路でクイーンズタウンへ、いよいよ異国の地に到着した。機中で呑んだウィスキィーのダブルが効いたのか心配した飛行機酔いもなく気分も爽快。

今回のNZの旅で是非やりたかったことは、①NZの自然に触れ星空をみること、②魚釣りをすること、③車を運転すること、④日本との違いをみつけること等々に期待しました。

11月26日　ルートバーンでトレッキング。ルートは、自然を基調に整備された大自然のパノラマを満喫。川から川へ藻を移動させない為に、靴底の消毒の義務づけ、「ネズミ」の罠いたるところに仕掛けてあり、食物連鎖を断切ろうとする試みには、感心させられました。

スチュワート島にて
撮影：天野

クリスマトパレード
（CHCHにて）撮影：天野

27日　インター・シティバスでNZ最南端の町・インバカーギルへ。28日フェリー乗場ブラハからスチュワート島へ、だが海が荒れ午前の便が夕刻へ変更となった。船酔いと共に無事上陸。早速雨の中天野さんと期待した魚つり、エサは烏賊の短冊をつけ浮きをつけ投入、エサに群がる魚、入れ食い。だが、23ｃｍ未満ばかり（25ｃｍ以下はリリースと法定されている。）NZの法律は釣った魚を食べさせないように決めたのかと疑いたくなる。やっと30ｃｍほどの魚を天野さんがキャッチ。CODという白身の魚で、鯛に似た味でした。とり合えず目標の一つを達成。期待したスチュワート島での南十字星と満天の星が見られず残念。いつの日か再挑戦をしてみたい。

30日　スチュワート島（南極に一番近い島）から双胴の高速艇で離島。皮肉にも晴で波穏やか。インバカーギルへ戻りレンタカーでダニーデン～オアマル～クライスチャーチ1000キロ強のドライブのスタート。車窓から見る景色は、まさしく「アルプスの少女ハイジ」の世界、緑の牧場に羊の群れが点在している。羊の母さんには、殆ど二匹の子羊が寄り添っている。口笛を吹くと一斉に逃げる。意外と臆病だった。NZは交通ルールも日本とほとんど同じ、ラウンド・アバウト（円形道路）に若干の注意がいるが全く問題なし。とはいうものの、ラウンド・アバウトでもたもたしていると、後続のパトカーが急にサイレンを鳴らし煽られて「ドキドキ。・・・・」しかし、殆どが時速100キロの直線走行で運転は最高でした。又、忘れかけたころに村があり、その村のBakery cafe店でのケーキはやたら大きく、又、凄く甘い。又、コーヒーよりも紅茶のほうがうまいと思った。歴史的にはイギリス領の為紅茶がうまいのはあたり前とか。北へ行くほど暖かくなる。建物は、北側から日が入るので窓は北向き、風見鶏の方向も何か変、日本との違いを見つけ納得です。宿泊施設モーテルはモーターロッジであり、2部屋（ベッドは必ずダブル・シングル＊2）と台所・リビングと何故か牛乳1本が標準でついている。ちょっとしたホテル並でビックリ。自分自身のイメージとは全く違っていた。

12月1・2日　オタゴ半島の古城バーカー家のラーナック城。ダニーデンでのYellow　Eyedペンギン・オアマルのBlueペンギンが夕刻に海から陸の巣へ戻って来る様は愛嬌があり、Blueペンギンが群れで道を横切る時、リーダーがまず安全確認、合図の叫びで一斉にわたり、その最後尾でチェック、他の群れのペンギンが混じっていると追い出したりとまるで人間の社会の縮図です。「ペンギン」や遠くに見える「あしか」、残念ながら見る事の出来なかった「アホウドリ」、又、魚やえび類は種類毎大きさを決めて制限をするなど国をあげて保護しているその徹底さが素晴らしい。日本も手本にすべきと思いますが！

奇岩の浜モエラキボルダーでは、何故か浜辺に2メートルの球状の岩が数十個。波に打たれて浜に残る不思議な光景で、隕石かと宇宙まで夢が繋がる面白さです。又、浜には「わかめ」が打ち上げられており、誰かがゲット、酢のものにしてお召し上がり。

3日　南島の大都市クライスチャーチの市内散策、何となく気高い教会や活気ある町並み美しさをそこはかと感じるそんな街。

4 日　待望の温泉リゾートハンマースプリングスへ。温水プールでひと泳ぎ・温泉でＮＺの旅の疲れが癒された。途中13.7ｋｍの一直線の道路・左右は整然とした松並木と壮観でした。

ＮＺの旅での食事は、何を食べても美味しいがとにかく量の多さに吃驚。グリーンムール貝のスープ、オタゴ半島での潮干狩り（貝名ﾋﾟｲﾋﾟｲ)のみそ汁や焼肉バーベキュー、特に、三つ星ＳＰビールのラッパ飲みがうまかった。

奇岩の浜　モエラキボルダー　　撮影：天野

5 日　クライスチャーチからオークランドを経由して関空へ。旅に出て「帰りたくない」と思ったのは初めてでした。今回の旅は、我人生の一大イベント、又、機会があればマイワイフと同伴で参加したいと思います。宮本ご夫妻・旅行リーダーの北出様はじめ参加者の皆様には心からお礼申し上げます。弥栄

‘4WDでクックタウンへ’立石　雅彦

2005年8月､縁あってエアーズロック(ウルル)へのツアーに参加した｡アリススプリングスからウルルまでは､バスでほぼ8時間､低い木がまばらに生えるだけの赤い大地が続いた｡これでオーストラリアのアウトバック(未開地)にはまってしまった｡

帰国後、三重ANZ協会主催レンタカー旅行を経験した妻が同様の旅行をしようと提案、何となくケアンズに行くことにした。地図を眺めていたら、クックタウンという地名が気になった。手持ちのガイドブックにあまり情報はないが、インターネットを通じて次のことを見た。ヨーロッパ人として初めてオーストラリアへ航海したジェームズ・クックが1770年上陸したこと、金鉱として繁栄したことが分かった。何よりも、熱帯ジャングルの道を水しぶき上げながら4WDで行くことに惹きつけられた。

妻と二人だけでは心許ないので、宮本さん（協会会長）一家を巻き込んだ。2006年9月、出発前にレンタカーと二泊分のモーテルを予約しケアンズに到着。市内の案内所で道路状況を確かめたところ、運転熟達度を質問され、密林の道(ブルームフィールド・トラック)は避けるよう強く助言された。モーテルでもこの地帯へ行ってはならないと断言され､内陸を迂回する道(半島開発道路､2005年クックタウンまで舗装完了)を進むことになった。

3日目にクックタウンを目指す。農場や森林の中を1時間ほど走ると乾燥地帯に入いる。砂漠ではないが、疎林である。対向車はほとんどない。まれに放牧牛がいるが、人家は見られない。車に跳ねられた牛が道路脇に横たわっている。干上がった小川に橋はなく、川底に沿って横切る。雨期にはどうなるのだろう。そのうち、遠くに煙が見えた。山火事である。少し不安を感じつつ道路脇の展望台で車を止める。ユーカリの木が焦げ、まだくすぶっているのを発見する。下草は既に灰になっている。そういえば、走ってきた道路周辺にも焼けこげた樹木が多かった。自然のなすがままにされているのだと思い至った。

クックタウンは広い市街地にまばらな人家、ゴールドラッシュ後人々が去ったことを伺わせる。エンデバー川は､キャプテンクックがエンデバー号を寄港させた時とおそらく同じように､蛇行しながらゆったり海に入いる。そこに釣り船がいくつか浮かんでいる。今はのどかな漁村になっていた。このほか、ワニのショーをおそるおそる楽しみ、未舗装の脇道を走行して外洋に面する岬を訪問し、車に乗ったまま渡し船で川を越え、熱帯ジャングルの森林浴を堪能し、ちょっとした広場で昼食をとっていた。突然現れたオオトカゲに昼食のレタスを奪われ、みんなびっくり。グレートバリアリーフの小島(ローアイルズ)で珊瑚を見ながら泳いだ。なお、レンタカーの返還は、空港パーキングに乗り捨て、キーと書類を空港ビル内のレンタカー会社カウンターのボックスに入れるだけで完了した。ケアンズ空港で、出国手続の際、係官からどこに行ったのと聞かれ､「クックタウン」と答えたら、すごくびっくりされた。

小冒険旅行だったが、オーストラリアの荒々しいけれど美しい自然と、それと共にある人々の暮らしぶりを垣間見ることができた。次はいつどこへ行けるかな。

〔投稿〕

「雲南紀行」　増田陽一

中国の正月は旧正月で今年は2月18日からでした。正月休み一週間は商店も食堂も殆ど閉めてしまい、都市へ働きに来ている人や学生が田舎へ大移動をします。

昆明で働く楊さんは少数民族のイ族です。22歳のジーパンのよく似合う美人の奥さんで正月は田舎へ帰るとの事、冗談で一緒に行くと言ったら、大歓迎という事になりノコノコとついて行くことになった。昆明からバスで西へ2時間、そこから歩いて2時間のところに実家はあり、風呂も便所もなく不便な所で寒いと聞かされた。
昆明でロングステイしている関老人（67歳）も行く事になり、私たち三人は早朝にバスターミナルに集合し、切符を買おうとしたら二倍以上の正月料金に変えてある。「こんなこと国営企業がやってええのか！」と関老人が大阪弁でのたまったが、ここは何でもありの中国である。バスの運転手は副業で何処でも手を上げた人を乗せるため4時間余りかかった。途中一度もトイレ休憩がなく、いよいよ限界と、関老人を見ると同じく脂汗を流しているではないか。人を掻き分けて「おしっこ」と叫んだ。

登り口には村に一台きりのトラチャー（トラクター＋リヤカー）が用意されてあり助かったと乗り込むが、これが苦行の始まりでした。少し待つと客は膨らみ、総勢11人となった。トラチャーに乗るのは荷物で、急勾配の道を後ろから押す必要があった。四つの山と谷越えの4時間半の苦行であったが、無事日が落ちるまでに村にたどり着いた。このイ族の村に外部の人が来たのは久し振りと村を上げて大歓迎を受けることになりました。
イ族の村は山あいに密集していた。山の斜面に農作物を植え自給自足に近い生活をしている様子である。家屋は門を入ると正面に土レンガの住居があり、左右に台所と豚、ヤギ、鶏などの小屋がある。私が子供の頃過ごした田舎と同じで家畜と共の暮らしである。正月のご馳走は豚肉と鶏肉、自家製である。豚は事前に処理されていたが鶏は目の前でさばき、新鮮なのを頂きました。

トイレは何軒かの共同で男女の区別無く目隠しに体裁程度に板が立ててあり、そこに.不安定な丸太が渡してあり、私は重量オーバーで折れないか、心もとないトイレであった。部屋には清潔な寝具が敷かれていて、もてなしの心遣いを感じたが、深々と冷え込む海抜3千m以上の高地にこの布団は薄すぎる。持参の寝袋にて就眠した。
関老人曰く、「星明りを知っているか？」。ガラスが割れている窓から明かりが差し込んでいる。空を見上げると手の届きそうな満天の星空でした。　つづく。

《編集後記》

総会延期、よって少しニュースレター遅れても大丈夫、というところのゆるみが発行を一か月以上も遅らせる大きな原因となりました。まことに申し訳ありません。

今回もリアルな冒険旅行、楽しみながら編集しました。主体的に楽しんでいる様子がさすがです。

来年3月、学生に引率しての初めてのオーストラリア予定です。楽しみにしています。（梶）

＜事務連絡＞
○会費未納の方は納入をおねがいします。
百五銀行津市役所出張所
ミエゴウエヌゼットキョウカイ　82920
○新たにＥメールでの配信をご希望の方
TEL&fax　0235（29）0547　宮本まで。

発行　三重オーストラリア・ニュージーランド協会
発行責任者　宮本忠　Tel 0235（29）0547
〒997-0035　鶴岡市馬場町１４－１　東北公益文科大学
ＨＰ：mieoznz.com
Ｅメール：miyamoto@koeki-u.ac.jp
※　この会報にある文章・写真の無断掲載はご遠慮下さい。